

# ホトトギス

七月号

ホトトギス  
創刊 一九二四年七月  
編集 二〇二四年七月  
発行 二〇二四年七月  
社団法人 日本植物学協会  
〒一〇〇〇〇〇  
東京都千代田区千代田



## 俳句随想〔四百二十一〕

汀子

今年は正岡子規生誕百五十年ということで神奈川近代文学館に於て今展示をしている。

オープニングの式典に出席してご挨拶を簡単に述べた後、展示をゆっくり見ることが出来た。この神奈川近代文学館では何年か前に「近代俳句の夜明け―子規から虚子へ」という展示会を開催して頂き、好評であったことも記憶に新しい。図録も内容の濃い立派な冊子として大勢の方々に親しくお求め頂いた。

この度、子規生誕百五十年の展示の中のイベントとして、子規の病床で始まって、その後「ホトトギス」で続けて来た「山会」を皆様に見て頂くということになった。近代文学館の副館長の長谷川權さんが一度山会に参加されたご縁で、このようなことが実現するのだと思っている。あとお二人の芥川賞作家の参加を頂いて開催される。勿論、出演の四人は写生文を書いて来て発表することになる。余り打合せもしていないのでどの様なことになるか判らないが、私は楽しく山会を盛り上げる努力をしようと思

う。子規の病床で始まった山会、その後は、虚子庵に於て、虚子亡き後は年尾の東京の部屋で、又、芝公園の鰻屋玉川さんの二階で続けられて来た。今は東京の私の部屋で毎月開催される。ホトトギス読者も投稿して参加される。

写生文がこの機会に脚光を浴び、多くの方々に興味を持って頂き、参加して頂くことが出来れば、子規も虚子も、年尾も喜んで貰えるであろうと期待している。その日のイベントの成功を祈っている。

句日記 汀子

平成二十八年七月二日 芦屋ホトギス会

六甲の山の暮しの兜虫  
涼しいと言へば涼しくなつて来し  
夏服は若き日のもの着ることに

七月三日 下朝句会

誰彼を悼みし汗でありしか  
山荘の古藤椅子の半世紀  
動くたび帆む藤椅子古りしこと

七月六日 ロイヤル佛壇

滞在の短き汗の日々となる  
仙人掌の花にゆだねし滞在に  
海開昔の浜辺失せし街

七月八日 工業倶楽部

白南風に海展けゆく旅路あり  
七月九日 東海ホトギス俳句大会前日句会

降路越えなほ梅雨の旅心  
久闊の心よ梅雨の荒るるとも  
梅雨明ともう言へさうな旅の晴

七月十日 東海ホトギス俳句大会

梅雨の旅昨日を遠くしたる晴  
今日の晴至福の梅雨の旅二日

七月十二日 大阪倶楽部

月見草似合ふ旅路でありしこと  
作り草とは思はれぬ高さかな  
旅に会ひ今日又会へて会涼し

七月十二日 綿業倶楽部

夜目遠目人の動きの月見草  
雲の峰つつ切る機上アナウンス  
結局は日傘となつてしまひけり

人悼み人を偲びてさす日傘  
崩れんとしてなほ雲の峰なりし  
七月十四日 清交社

山路行くここにも青田展けたる  
雲の峰抜けて着陸態勢に  
なほ伸びて行く勢ひ見せ雲の峰

七月十六日 石見ホトギス俳句大会前日句会

百合の香をさらふ山風海の風  
梅雨荒る頃旅二つ西東  
計画は着々梅雨を乗り切らん

七月十六日 石見ホトギス俳句大会前日句会

見馴れゆく合歡の花とて新しく  
邂逅の涼しき旅の一頁  
七月十七日 石見ホトギス俳句大会

合歡の花翼広げて句碑を守る  
残さる句碑にみどりの風の吹く  
七月十八日 地球ボランティア協会俳句会

旅の汗をさめて集ふ朝かな  
遅れくる一人を待ちて汗の句座  
高原の昨日は遠し汗の句座

七月十九日 有恒俳句会

梅雨明といはれ納得したる晴  
庭師去り庭の明るさ金亀子  
梅雨明の雲の走つて終りにけり

七月十九日 無名会

昔ほど見かけぬことも月見草  
梅雨明や朝の大気の甦る  
旅多きことも梅雨明有難く

七月二十日 夏潮句会

高平原の風入れ替り露涼し  
体調を汗に委ねてをりし旅  
三瓶野はわがまほせをりよ露涼し

七月二十日 夏潮句会

露涼し書かねば消ゆることばかり  
今宵咲くかき女王花蕾上げ  
着ることのなき思ひ出も虫干す

虹消えて空の広さの戻りけり  
梅雨明けて一変したる旅心  
生きてゐる言葉の中に消えし虹

七月二十三日 野分会夏行

羅に包みし若さありにけり  
若者の汗の笑顔の揃ひた  
靴替へ扇子忘れてをりしこと

七月二十四日 野分会夏行

一日の予定やりくり夏の旅  
緑日に道塞がはれてゐる暑さ  
口にせし暑さよ日にせぬ暑さ

七月二十七日 アネモネ句会

若き日に戻る会あり露涼し  
日焼して少し若さを取戻す  
睡蓮も姫逃池の化身かど

七月二十八日 きさらぎ句会

過不足のなき日焼とはむつかしく  
睡蓮の閉ぢる時間の帰路となる  
竹めば睡蓮咲いてくれにけり

七月二十八日 きさらぎ句会

又問はれどこで日焼をして来しと  
身ほとり又死ぬふりを置きて寿  
金亀子又死ぬふりを置きて逃れ

七月二十九日 時雨句会

一つづつ予定消しゆく汗涼し  
東京もやうやく梅雨の明けしこと  
滞在の長し団扇の置きどころ

七月二十九日 時雨句会

我一人汗の遅刻となりしこと  
夏山家子育て時代なつかしき  
梅雨明けてし東京の空新しく

七月三十日 「あらうみ」九百号祝賀句会

冷房を消さずに出掛け来しこと  
快晴といふ涼しさの祝ぎ心  
東京を発ち金沢へ露涼し

七月三十日 「あらうみ」九百号祝賀句会

快晴といふ涼しさの祝ぎ心  
東京を発ち金沢へ露涼し

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年七月一日 俳句入門講座句会

青鷺の眼光といふ殺気かな  
万緑をはみ出して咲く一花かな

七月十三日 あうたう句会

朝曇 払ひ葉流さん 現るる  
親の手を離れたき子や水遊  
せせらぎのフーガ河鹿のアルペジオ

七月七日 蕉心会

分館といふ懐かしき夏館  
レストランサラリーマンの昼寝時  
橋涼み隣の橋を眺めつつ  
箱庭のこの辺に置きたき戦車  
箱庭は山崎さんの自信作  
瘦身となりて炎帝なんのその  
遊船に速度合はせて鴨二羽  
鳩の子に大川水を和らげる

七月九日 東海ホトギス俳句大会

白南風へ塗り替へられゆく天与  
サミット飛行機雲の突き刺さり  
円虹に飛行機雲の突き刺さり

七月十一日 朝日カルチャー若草句会

磯涼み 真珠 育む沖を見て  
夜涼みやだんだん近くなる二人  
毛虫這ふ大樹縮んでゆきにけり  
虹立ちて君との過去を清算す  
夕虹に突つ込んで行く空母かな

七月十二日 むさし野吟行会

露座仏といふ涼しさでありにけり  
大仏を囲む黄色い夏帽子  
大仏に平伏す国の人涼し

七月十四日 土筆会

安芸石見近江明日より避暑の旅  
月見草三瓶に星を増やしゆく  
月見草一つ灯して三瓶の夜  
江戸の世の香りを今に青田風

七月十五日 浜田吟行会

山陰といふ涼しさと優しさに  
夏燕視野を逸れゆく速さかな  
白波を重ね重ねて夏潮に  
日表に風蘭といふ雅かな  
日差得て風蘭幹を彩れり

七月十六、十七日 石見ホトギス俳句大会

花合歓を抜け花合歓を抜け句碑へ  
眼鏡美人涼しく眼鏡外されし  
水嵩を使ひ切つたる未草  
蝸に草原狭められてゆく  
青嵐今夜の星を見せ給へ  
未草山気靈気に目覚めゆく  
月涼し火星木星土星統べ  
老鷲に引つ張り出されたる朝日

七月十九日 北國文芸選考吟

睡蓮に午後の日差の遠ざかる

七月二十一日 登高会

海の日を淡海に使ひ切つてをり  
青林檎ノルマンディーの碧き空  
碁敵に句敵揃ふ露台かな  
海の日や戦艦三笠動かざる

七月二十二、二十四日 野分会夏行

青鷺の水面を覗む孤高の目  
御影石愛でる御影の人涼し  
葉流さんが行く青鷺を従へて  
雨後といふ葉を彩れる露涼し  
岩崎家今に伝へて池涼し  
蟬時雨神代を語るものとして  
夏蝶の吸ひ込まれゆく神の杜  
東京の下町といふ灯涼し  
宮涼し二礼二柏手一礼に  
目覚めゆく街晴れてゆく朝曇  
蟬びたと止みて柏手響きけり  
閉ざされし老舗のホテル首都晩夏  
將軍を祀る大寺鷗尾涼し  
高階の弥撒や祈りの声涼し  
ビル街の真ん中といふ万緑裡

七月二十六日 若水句会

三瓶野の花合歓夕日離さざる  
宍道湖の土用蛭といふ高値  
夕焼に吸ひ込まれゆく五万頓  
上戸とて土用蛭は欠かせざる  
花合歓の風汀子句碑磨きゆく  
花合歓に男三瓶目覚めゆく早さ  
夕焼に黄泉近付けてゐる漢

七月二十七日 目黒学園句会

夕菅や三瓶野夜を眠らせず  
夕菅や三瓶の太古知つてをり  
和光裏通り 風鈴 売 鬮 歩  
なすの艶箸が滑つてをりにけり

七月三十日 「あうみ」九百号記念俳句大会

梅雨明けて百万石の賀の旅へ  
加賀と江戸繋ぐ晩夏の祝ぎ心  
露涼し句碑に再会てふ縁

# 雑詠

## 廣太郎 選

買初に供華を加へて帰り来し 相模原 木村享史  
 寒の老氣づかふ朝な娘のメール 同 同  
 関所跡遺す冷たきものばかり 同 同  
 野に遊ぶ連れなきときもあるごとく 香川 湯川 雅  
 のどけさの中に独りといふ不安 同 同  
 沖霞めくれ出で来し漁舟 同 同  
 冴返る日の風雪に旅立てり 長岡 安原 葉  
 春めきし旅にも抱へきし一事 同 同  
 よき旅も果てて家居の月朧 同 同  
 寒林の疎の枝密の雨霰 岡山 伴 明子  
 日時計の刻み損ねてゐる冬日 同 同  
 地に描く影が支へてゐる枯木 同 同  
 一人来て一人梅見て帰りゆく 東京 今井千鶴子  
 大寺の裏門ひそと梅盛り 同 同  
 濡れて着く小さな荷物春時雨 同 同  
 耕人の土嗅いでみて舐めてみて 同 田丸千種  
 太陽は土をことほぎ春祭 同 同  
 立つ脇侍坐る観音座禅草 同 同

風を食み草木を食みて野火走る 袋井 湖東紀子  
 海の青より引き上ぐる海苔の青 同 同  
 海苔搔の背に海が鳴る風が鳴る 同 同  
 薄氷や張りつめながら解けながら 龍ヶ崎 今橋真理子  
 海苔粗朶の海を機影のまたよぎる 同 同  
 砂時計さらさらさらと二月尽 同 同  
 澄みし目で濁世を眺む古雛 神戸 涌羅由美  
 西山を秘色に染めし夕霞 同 同  
 春潮に銀の水脈曳く觀光船 同 同  
 道それてわざわざ青き踏むやから 東京 橋本くに彦  
 春光をつつばね動く水面かな 同 同  
 せせらぎの歌声いよよ温む水 同 同  
 聖夜星にほふごとくにありにけり 熊本 岩岡中正  
 子の肩に手を置けば冬あたたかし 同 同  
 天上の主の見そなはず絵踏かな 同 同  
 花の頃待たるる柳生陣屋跡 神戸 後藤比奈夫  
 雷が十兵衛杉を枯らしたる 同 同  
 炭焼いて隠れ里めく柳生かな 同 同  
 下町の路地の下萌つつましく 東京 大久保白村  
 水温む音の弾けてをりにけり 同 同  
 遊ぶ子の誰も見てみぬチューリップ 同 同  
 薄氷を割れば自由な水生るる 神戸 山田佳乃  
 春寒や固くなりたる鍵の穴 同 同  
 冴返る巫女の鈴の音三拍子 同 同

# 雑詠句評（六月号より）

しげ人・一歩・雅

仁義・くに彦・公次

佳乃・さい雪・純也

霜衣・廣太郎

## 雪女郎驚張りを音もなく 神戸 山田佳乃

雪女郎が驚張りを音もなく過ぎていったという。驚張りがなされているのでお城か大きな寺社か立派な武家屋敷かなのだろう。この句は、作者が訪れた所に伝わる雪女郎の伝説かもしれない。あるいは、大雪の夜に濡れるはずのない廊下が濡れてでもいたのか。あるいは、作者自身の実体験か。

雪女郎の妖しさが読み手に色々と連想させてくれる一句である。その妖しさを引き立てているのが「驚張り」というシチュエーションであり無音の世界である。また、連続性を含ませている下五の収束である。

雪女郎という季題の特性を活かした一句である。（しげ人）

筆者の生家も子供の頃、先年汀子名誉主宰が転落した辺りが驚張りであった記憶がある。人がどんなにゆつくり歩いててもきゅつきゅつと音がして城や武家屋敷では忍者除けであったそうだ。雪

の二条城を吟行された作者だが、格調高い城と、雪女という季題の何とも素敵な取り合わせに脱帽する。（廣太郎）

## 神の世は国栖に始り紀元節 神戸 和田華凜

写生をする俳句には先ず出てこない「神の世」が出て来、更に「国栖」という語にもとまどったが、国の基礎ともいうべき人々が先ず集って住むという語に、そして「国栖に始り」は所謂、集い人の生活の里よりに集団が住みついたということが分った。即ち人間というものの世が始まったことを詠ったのであろう。「国栖」という語に此の句の焦点があることは分るが私の客観写生観としては具体的景が眼に浮んで来ないということと言えるが、一面、季題が「紀元節」であるから此の句も大きな意味では、客観写生と言えるかも知れない。（一歩）

現在では「建国記念日」が一般的だが、作者は敢えて紀元節として詠んでおられる。やはりこの季題を詠む時には、日出づる国の民としての誇りも一つの着眼点であろう。最近ではこの祝日のあり方について議論がされたりしているが、日本国民としてこの句には大いに賛同するものである。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

心子選

芦屋川日輪眩し草萌ゆる 東京 河野美奇  
 近径の草萌ひろひ跳ねてゆく 同  
 松手入地震の記憶も新たなる 同 稲畑廣太郎  
 松手入星のきざはしより俯瞰 同  
 春浅し北国はまた荒るるとふ 長岡 安原 葉  
 山笑ひそめしを又も閉ざす雪 同  
 賤が屋に灯り沈沈聖誕樹 神戸 後藤比奈夫  
 聖誕樹立ちぬシャンパン抜くべかり 同  
 舩挿して湖の青さの極りぬ 同 和田華凜  
 早春の光回して万華鏡 同  
 踏んでゐる土がふるさとあたたかし 熊本 岩岡中正  
 春寒の橋行きて旅人となる 同  
 追はるる日ばかりでもなし十二月 相模原 木村享史  
 一木もなほざりならず寒肥す 同  
 一年の今ごろが好き梅二月 東京 今井千鶴子  
 露の臺ひとつの春を賜りし 同  
 虚子館に花絶ゆるなき二月かな 神戸 三村純也  
 虚子館を守るが如く木々芽吹く 同

二ヶ月の風一日また風一日 龍ヶ崎 今橋真理子  
 明るさに誘はれし庭春寒し 同  
 春寒の忌日の墓にひとり来て 東京 山田潤子  
 ふる里に海鳴りを聞く寒の明 同  
 懸想文買うて豆茶をいただきぬ 神戸 浜崎素粒子  
 懸想文これしきの文書けるかも 同  
 雨に濡れ寒三日月のほのと赤 仙台 赤川誓城  
 病廊のきしきし軋む余寒かな 同  
 星月夜ギリシヤ神話を描きたる 福山 竹下陶子  
 盛り場へ走りこみたる夕立かな 同  
 竹串の穴跡哀し目刺やく 東京 高濱朋子  
 夕闇を動かす色や椿落つ 同  
 海風に負けずに揺れて野水仙 熱海 嶋田一步  
 年尾偲ぶこと海も見て野水仙 同  
 さみどりに青にじみ初む四葩かな 東京 今井肖子  
 袋かけうすき光をとちこめて 同  
 空の青淀川の碧春近し 吹田 大橋 暁  
 噴水のしぶき煌めき春早し 同

## トナ ー 稲畑汀子

「ホトトギス」の主宰になり、いよいよ文章を次々書かなければならなくなつてから、四十年ほどの歳月が過ぎた。特に、昭和五十八年にお頼まれた西日本新聞の連載は大変であつた。毎週月曜日から金曜日まで、毎日千字ほどの文章を五十編書いていかなければならなかつた。夫が亡くなつた悲しみに沈んでいる時間はなかつた。

まだ私はパソコンはおるかワープロも使つていなかった時期で、原稿用紙に手書きした清書を封筒に入れて、西日本新聞社へ毎日郵便局へ出しに行つた。なかなか纏まらないで夜遅くなる、一晩中開いているという大阪の中央郵便局まで車を運転して出しに走つた。勿論、ファックスもまだ使つていない頃であつた。

それから間もなくワープロを薦められて使うようになった。それに慣れて行くと、何とも便利で有難い。「ホトトギス」に掲載する文章は、全てフロッピーに残され「次々書き進むことができた。私が二十年間俳句の特活授業を男子中学生に教えに行つたご縁で、オアシスのワープロとそれに付随した印刷機を私の書齋にどんと置くことになった。この会社の親指シフトのワープロに馴

れると、毎月の原稿、依頼された文章、葉書の印刷、すべて着々と仕事が進んで行く。更に、コピー機はホトトギスで使っているリコーを入れた。私の書齋はなかなか片付かないが、芦屋に住んで、東京のホトトギス社へはファックスで仕事を送られて有難かつた。

何時ものようにワープロの前に座つて、原稿を書き上げた。プリンターのスイッチを入れ、打ち出してみると、いつも黒々と字が浮き出るように原稿が出来上がるのに、字が薄墨なのに気がついた。

「え？このプリンター、長年どうもなかつたのに、こんなに字が薄くなつたというのは、トナーが無くなつてきているのではないだろうか。これまでずっと使つてきて、そろそろトナーが無くなつたのかも知れない」と急いでオアシスの会社を定年退職された、田中さんに電話を入れた。

「先生のコピー機はもう大分古いものですから、トナーが無いかも知れませんか」

「え？それは困つたわ」

「でも、何とか探してみましよう。こんな時のことを心配して、前に納めたパソコンの機器にワープロのフロッピーが打ち出せるコピー器がある筈ですよ」

「じゃあ、もしかしたら、あの大きな機械の事かしら」

「文房具の注文を取りに来ていた橋田さんが仕事を辞める時に置いて行ったのがあるはずですよ」

「じゃー一度も使ったことの無いあの機械かしら？」

「二度、お伺いしましょう」

旬日の間に来てくれた田中さんは、パソコンで使えるフロツピーの説明をして、トナーを探してくれると言って帰って行った。

間もなく、コンピュータで探したらオアシスのトナーが見つかったと電話があった。

「やれやれー」

それから、二三日して、矢張り無かったと電話があった。

橋田さんの後の文房具の注文を取りに来ていた藤沢さんにもトナーのことを話して探して貰った。

二十一年間にワープロもそれについているコピー機も廃番になっていてどんなに探しても難しいという答えばかりが返って来た。

パソコンで打ち出すコピー機が何とか少し、使えるようになった頃、文房具店の藤沢さんから電話が掛かった。

「先生、見つけましたよ、九州のオークションで、二十一年前のコピー機のトナーがありました」

何度もあったという知らせの後に、やっぱり無かったという断

りの電話が掛かって来ていたので、今度も半信半疑であった。東京から帰ってきた次の日、大きな段ボールを抱えて藤沢さんが来てくれた。

「合ったらいいけれど」

「でも二十一年前にお蔵入りしたものですから、トナーの状態が心配です」といいながらしつかりビニールに包まれた器具を取り出した。私もコピー機からトナーを外して机に並べてみた。

「わー、同じだ」縦横にトナーをほぐすように振って、機械に嵌めた。トナーは二十年の歳月をじっと待っていてくれたようだ。

